資料紹介

泊一区出土の獣帯鏡

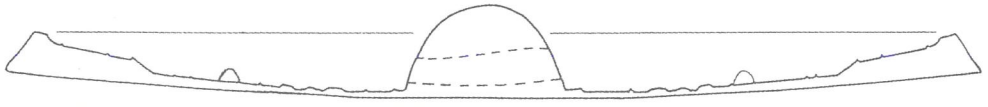
岡部　裕俊（伊都国歴史博物館）

Ⅰ　はじめに

県立糸島高等学校には、郷土博物館が設置されており、館内には２千点にもおよぶ歴史資料が展示公開されている。文部科学大臣指定のわが国唯一の高校付属博物館相当施設であることでも知られている。

館内には糸島地方出土の３面の銅鏡が展示されているが、そのうちの１面は展示プレートに前原市泊一区箱式石棺墓出土の記載がある。以前、本館図録で紹介したことがあるが、昨秋、本館で開催した特別展において再び本鏡を間近に見る機会を得たため資料の周知化を図るとともに、今後の検討資料とするため本稿で紹介する。

写真1　泊一区出土獣帯鏡（3/4）



第1図　泊一区出土獣帯鏡断面図（縮尺3/4）

Ⅱ　銅鏡の出土に係る記録

今回紹介する銅鏡が、どのような経緯をたどって郷土博物館に持ち込まれたものかはっきりとした記録は残っていない。昭和31（1956）年に作成された同館の陳列品目録に記載されていないことから、これ以降に持ち込まれたものと考えられ、また、原田大六氏が監修し前原町教育委員会が昭和47年に作成した町の文化財分布地図と文化財地名表にも、この銅鏡に関する記述は見られないので、本鏡の持ち込みはさらにこの後であった可能性が高い。この分布図の作成には糸島高校歴史部の顧問であった大神邦博氏も関わっていたことから、銅鏡が周知のものであれば本鏡に関する情報が記載されていたと考えられるのである。

ちなみに、郷土博物館が所有する他の２面の内行花文鏡はいずれもこの文化財地名表に出土地が記されている。

Ⅲ　銅鏡の観察

さて、銅鏡は鈕､外区はほぼ完存するものの、内区の４分の１程度が欠損しており、補填材(材質は不明)によって修復されている(写真１)。また、表面に土壌や繊維などが付着していて、文様の詳細な観察は難しい状況にある。

鏡面に付着している繊維をよく見てみるとタイプの異なる２種類の布地であることがわかる(写真２)。

布Aは、細い糸で目を細かく編んだ布が鏡面に貼りつくように付着しており、場所によっては幾重にも重なっている。布Bは、太い糸で織った厚手の布である。後者が前者の上を覆うように貼り付いている。まず、目の細かな布で包みこみ、さらに厚手の布で二重に包まれていたものと考えられる。

付着繊維の材質鑑定は行っていないが、外包の布は麻質の布ではなかろうか。

鏡面と布の上には赤色顔料も付着している。やや暗い赤色の顔料とともに、鮮明な朱赤色の粒子も確認できることから、これも材質の同定は行っていないが、ベンガラと水銀朱が棺内に塗布された可能性がある。

また、鏡や布には粒子の細かな土が塗膜状に薄く付着している。

銅鏡は直径17.7cm、鈕は丈が高い半球状を呈

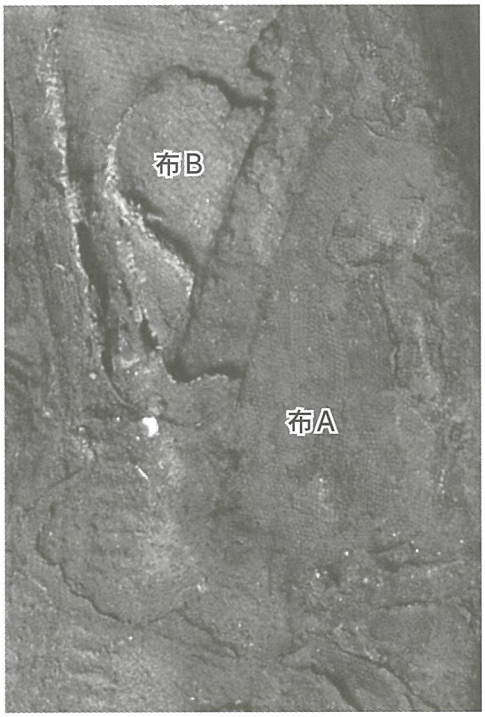


写真2　布付着状況拡大

しており、高さ1.7cm、内区は1.2～1.8mm、外区は外縁で厚さ8.2mm、内側で4.8mmほどを測る(図１)。錆の進んでいない部位では漆黒色を呈し、銅質は良好といえる。

文様の構成は内区では鈕座－圏線帯－櫛歯文帯－獣文帯－櫛歯文帯と続く。鈕座の文様について現状では錆、布などの付着物が厚く覆った状態で、その内容を詳細に観察することができないが、鈕座外帯の内縁には櫛歯文がめぐり、凹帯の間に有節重弧文がめぐっている(写真３)。

主文は、文様の配置関係から、等間隔に配された7個の小乳の間に一体ずつ神獣文が配された構成であろう。各小乳に四葉文が配される。神獣像はそれぞれ、細線で輪郭を描き本体は浮き彫り状に表現をとっていることから、七像を環状に配した半肉彫式獣帯鏡と呼ぶことができる。残念なが

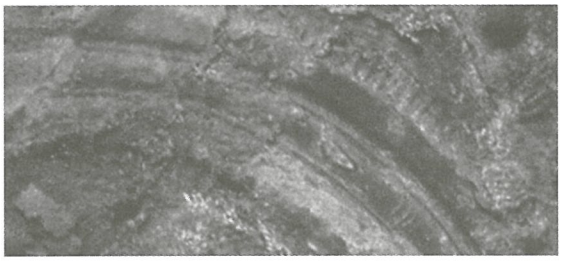


写真3　鈕座外区拡大

写真4　外区拡大

ら各文様とも付着物に覆われていたり、欠損していたりして十分に観察することはできないが、各所に禽獣文の一部を観察することができる。前掲では、１仙６獣と解説したが、とりあえず訂正しておきたい。

外区は、鋸歯文帯－画像文帯となる。画像文帯には流雲文と影絵状の文様の組み合わせで構成されているが、影絵表現は何を表したのかよくわからない(写真４)。

本鏡は鋳上がりの良さや文様の精緻さから中国鏡と考えていいだろう。岡村秀典氏の分類では、文様は外区が画像文1類、内区主文は獣文を主体として構成されるc類である可能性が高く、浮彫式獣帯鏡Ⅱ式に相当するものと考えられる。

Ⅳ　出土地の概況

本鏡が発見された泊一区は前原市の北端部に位置し、福岡市西区元岡地区、志摩町馬場地区と境を接し、地形的には、低丘陵の多い糸島半島の根幹部に位置する。江戸時代以前には志麻郡の泊村に属していた。丘陵の南端部は標高５ｍ足らずの水田地帯で、弥生～古墳時代は、丘陵の裾近くまで潟状の内海が西から入りこんできていたため、船舶の停泊地としての「泊」であったことがこの地名の由来となったと言われている。

志麻郡はその名のとおり「島」状に玄界灘に突き出ていたが、唯一、泊地区の南で志登地区を介し怡土郡と陸路が通じ、まさに怡土と志麻を結ぶ交通の要衝でもあった。

泊一区には弥生～古墳時代の遺跡、古墳が多く分布することが知られている（図２）。特に、丘陵上に位置するため、墳墓や古墳の存在が知られる。

弥生時代の遺構としては、棺内に大量の水銀朱を副葬していた後期の泊熊野甕棺墓が有名である。また、弥生中期～古墳前期の集落遺跡である桂木遺跡もある。この遺跡に程近い近い大塚地区では糸島最古の定型化した前方後円墳である御道具山古墳（全長63m）、泊大塚古墳（推定全長75m）が立地する。また、志登地区を見下ろす泊丘陵南端では泊城崎古墳（円墳、調査後消滅）や大日山古墳(未調査・消滅）などもある。

近年、泊一区に隣接する福岡市元岡・桑原地区では、九州大学の移転に伴う発掘調査で弥生時代～奈良時代にかけての遺跡が数多く発見されたことは周知のことである。

残念ながら、現状では、獣帯鏡の発見に関する情報は全く得られていないが、ちょうど昭和30～40年代にかけて、泊一区の丘陵上は蜜柑園が盛んに造成されていた。丘陵はブルドーザーなどによって拓かれ、多くの遺跡が調査を実施することもなく消えていった。前出の熊野甕棺墓もこれら一連の造成工事の際に発見されたとされる。本鏡も丘陵上で行なわれた工事の最中に偶然発見されたのではなかろうか。

Ⅴ　出土状況について

銅鏡はどのような遺構に納められていたのであろうか。銅鏡表面には布など有機質の遺物が付地していたためか、クリーニングは極力迎えられてい

いたことにより、副葬状況を語る情報が多く残されている。鏡面を再び観察してみよう。

鏡面の各所には青錆が被覆しているが、鏡背面には赤土がペースト状に付着している。また、鏡面に残る繊維は遺存状態が良好で、鏡面との間には隙間がある部位もある。発見される直前まで空隙のある遺構内にあったとみられ、箱式石棺出土というキャプションの記載を裏付ける。

また、表面に赤色顔料が付着することから、主体部内に赤色顔料が塗布・散布されていたものと考えられる。

なお、内区の4分の1ほどが欠損について、これが破砕などの葬送時の祭祀的行為によるものか、何らかの偶発要因によるものか現状では明らかではない。

獣帯鏡は岡村氏の編年では漢鏡5期に製作が開始され、細線式は四神鏡と、半肉彫式は画像鏡や神獣鏡と近い特色を有し、浮彫式は細線式より後出するとされる。ところが、細線式獣帯鏡は弥生後期の墳墓に副葬が始まるものの、浮彫式獣帯鏡は庄内式期に破鏡副葬が開始され、完形鏡の副葬はさらに後れて古墳時代前期に開始されるという顕著な出土傾向差が認められる。

また、泊地区では、2面の銅鏡とともに勾玉1、管玉15、鉄素環頭大刀が出土した大日山古墳の主体部は箱式石棺であったとされ、津和崎権現古墳(前方後円墳・志摩町津和崎・前期)でも箱式石棺から画像鏡1面が玉類とともに出土しており、銅鏡はいずれも完形に近い状態であった。

したがって、本鏡が出土した箱式石棺も古墳時代に属する可能性が高いと考えられる。

VI　おわりに

今回の紹介では、資料の表面観察結果を中心に概要を報告するにとどまった。

今後は、糸島高校との連携を図りながら銅鏡の文様や付着物の考古学的・自然科学的な調査を行うとともに、本鏡のよりよい保存環境づくりについても検討していきたい。また、本報告を端緒として、銅鏡の発見から糸島高校搬入までの経過をたどる新たな情報を得ることができれば、望外の喜びである。

参考文献

伊都歴史資料館 1992「伊都 - 古代の糸島－」
伊都歴史資料館 1997 『再見！糸高の博物館』
前原町教育委員会 1972『前原町文化財地名表』
福岡県教育委員会 1980『福岡県遺跡分布地図』
岡村秀典 1993「後漢境の編年」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
樋口隆康 1975『古鏡』 平凡社
後藤守一 1926『漢式鏡』 雄山閣
高橋徹 1994「桜馬場遺跡および井原鑓溝遺跡の研究」 『古文化談叢』第32集　九州古文化研究会

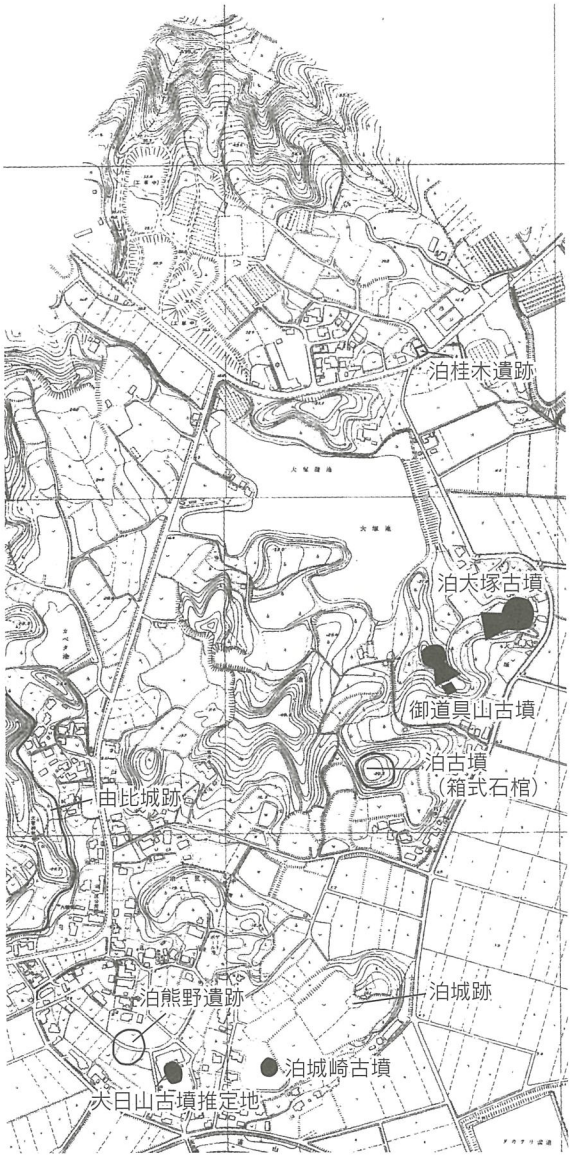


図2　泊一区周辺の地形（1/10,000）